



ドクターよもやま話

「たかが胆石とあなどるなかれ」



副院長 市原 透

胆のうは、肝臓の下に固定されている長さ7~8cmのナスに似た形をした袋状の臓器です。胆汁は、肝臓から肝管を通り、胆のう管から胆のうへと送り込まれ貯蔵されます。胆のう管から下には胆管が伸びて総胆管と呼ばれ、十二指腸へとつながっています。さて、こなれた食物が胃から十二指腸へ入っていくと、胆のうが収縮し、胆汁をタイミングよく十二指腸へ分泌します。胆汁が、膵液とともに十二指腸に流れ込んで、特に脂肪を分解し、小腸からの消化・吸収を助けるのです。この胆汁の成分が結晶化してできる結石を胆石といい、これが胆のうや胆管にできて激しい痛みなどを起こすのが胆石症です。胆石ができて、無症状（サイレント・ストーン）だったり、みぞおちに鈍痛を感じるだけという場合があります。しかし、胆のうが収縮して胆汁を分泌する時、胆石が出口に引っかかると激痛（胆石疝痛発作）が生じ、強くなったり弱くなったりを継続的に繰り返します。胆管に胆石がつまっても同じ激痛が走ります。肩や背中も痛む（放散痛）のが胆石症の特徴で、吐き気や嘔吐が出ることもあります。発作が起きやすいのは脂っこい食事をした数時間後、夕食の後の寝入りばなどです。また、胆石が膵液の十二指腸への流れを妨げることもあり急性膵炎（胆石膵炎、膵臓の自己消化）を発症し、非常に危険な状態をひきおこすこともあります。

胆石で胆汁の流れが滞ったりすると、胆のうや胆管が細菌に感染しやすくなり、急性胆のう炎や胆管炎を合併することがあります。軽いうちなら抗生物質の服用でよくなることもありますが、ひどい場合には胆のうがくさって破れ、腹膜炎や胆のう周囲膿瘍を起こしたり、総胆管が膿汁で満たされ行き場のない細菌が血流に乗って全身を巡る敗血症を併発し命にかかわることもあります。また内科的治療でいったん強い炎症を治めても原因となる胆石は残ったままで、今度は硬く萎縮した胆のう（慢性胆のう炎）となり開腹手術でも摘出操作が極めて難しいこともあります。

もうひとつの重要な問題は胆のう癌です。日本人の胆のう癌は胆石を合併していることが多く、結石に隠れてがんの診断が難しいことが多いのです。胆のうの粘膜にとどまる胆のう癌は胆のうをとるだけで95%以上治るのですが、それより深く浸潤すると胆のうだけでなく肝臓の一部や胆管、周囲のリンパ節を一緒にとるような大掛かりな手術をしても治すのがとても難しくなります。

このように胆石に関連して発生する病気は治療がおくると厄介で生命に危険が及ぶことが多いのですが、幸い胆石は超音波検査で簡単に見つけることができ、胆のう摘出術を行うことにより上述の危険な合併症のほとんどを未然に回避できるのです。しかも、軽いうちならおなかに小さな穴を4個あけるだけの腹腔鏡下胆のう摘出術ですみ、術後1週間以内に退院が可能です。豊橋医療センターでは手術中に胆管の造影を行い、総胆管から十二指腸へ胆汁がスムーズに流れることを確認しており手術に関連した合併症は皆無ですので安心です。

皆さんもたかが胆石とあなどらず、胆石でひどい目に合わないためにも私たちの外来を気軽に訪れて下さるようお勧めします。

